

「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」報告書

井上 暁子

私は、平成 21 年度に実施された共同利用型（個人による研究）の一環で、2010 年 3 月センターに一週間滞在し、「ドイツ・ポーランド国境地帯の文学：パヴェウ・ヒュレ『ヴァイゼル・ダヴィデク』」という研究課題に従事した。ヒュレ（グダニスク生まれ。1957-）は、現代ポーランド文学を代表する作家のひとりで、上記の作品によって「ドイツ＝ポーランド国境地帯」というトポスをポーランド文学にもたらしたことで知られている。センター滞在期間中、私はこのトポスの形成過程について調べた。

第二次世界大戦後ポーランド領に併合されたドイツ＝ポーランド国境地帯は、「東部国境地帯」（ポーランド語で「クレスィ Kresy」と呼ばれる）と同様、戦前は多民族的・多文化的・多言語的空間であったが、その世界は、ホロコースト、戦後の領土、政体の変更、住民の強制移住などにより激しく損なわれた。東部国境地帯が、1950 年代から、チェスワフ・ミウオシュをはじめとする、数多くの著名な亡命作家の作品やエッセイで取り上げられたのに対し、西部国境地帯がポーランド文学の題材となったのは、1980 年代半ばのことであった。中心的担い手は、1949 年グダニスク生まれたステファン・フフィンのほか、1960 年前後グダニスク、シロンスク地方、シチェチンに生まれたパヴェウ・ヒュレ、オルガ・トカルチュク、インガ・イヴァシウフといった若手作家たちであった。

彼らの作品の特徴のひとつに、少年や少女の目から西部国境地帯が語られるということがある。とくに後者の若手作家たちは、自らが少年少女時代を過ごした 1970 年代のポーランドを回想する語りの形式をとることで、当時のプロパガンダや公的な言説と、子供の目に映る世界（それは、現実と幻想の間をいつも揺れ動いている）との差異を描き出し、個人の物語として提示した。こうした特徴は、ポーランド文学研究で、1960 年代生まれの作家に共通する「大文字の歴史からの逃避」と呼ばれている。

もちろんこの特徴と、「大きな物語から小さな物語へ」という、ポストモダンの傾向とが連動していると見ることも可能かもしれない。しかし、90 年代のポーランドで、ポストモダンを自称する一部の作家たちによる偶像破壊が過激さを増す中、西部国境地帯出身の作家たちは、それ自身が目的と化した「脱神話化」傾向と一線を画し、失われた地域の「神話」を、ドイツ人やユダヤ人といった〈不在の他者〉と共に探すことを選んだ。モダニズムの伝統を継承する彼らの文学は、現代ポーランド文学の主流となっただけでなく、ドイツ・ポーランドにまたがる地域の越境的文学とみなされている。